



2019 年 (令和元年)
5月号 (No. 888)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

ヴァイア・アルピナ・ワンのトレッキング

——スイス東部のザルガンスから西のモントルーまで
—— 昨年の本会報5月号に続く、スイス・アルプスのロングトレッキング第2弾。小国リヒテンシュタインからスタートしてレマン湖畔のモントルーまで全長約370km、別名「アルプスの峠ルート」とも呼ばれるVA1を20日間で歩いた記録。ハイライトは、ファウルホルンから見たベルナーオーバーラントの山々の大展望。

河野 長

一昨年の夏、シャモニからツェルマットまでのトレッキングを楽しんだ。この旅がとてもしずらしかつたので、前年と同様に昨年夏も8月下旬から9月にかけて、またスイスに出掛けた。今回選んだのはヴァイア・アルピナ・ワン(VA1)と呼ばれる、東西に約370kmもあるルートである。
リヒテンシュタイン国境からスタート

羽田を8月22日午前の飛行機で発つて、同じ日の夕方、チューリヒに到着する。そのまま空港からスイス国鉄で国境近くのザルガンスまで行く。こうして物価の高いチューリヒでの宿泊を避け、その上、翌日からすぐにトレッキングを開始できる。
1日目はバスでリヒテンシュタインのガフライまで行き、そこからザルガンスへ歩いて戻った。リ

目次

ヴァイア・アルピナ・ワンのトレッキング
——スイス東部のザルガンスから西のモントルーまで…………… 1
第7回小島烏水祭開催される …… 5
山梨支部創立70周年記念集會を開催 …… 6
大久保春美記念
「第9回ふれあい登山」を開催 …… 7
平成から令和へ、森づくりは続く …… 8
最近の中国登山界事情 …… 10
追悼 三好まき子さんを悼む …… 11
支部だより 北海道支部 …… 12
図書紹介 …… 13
図書受入報告 …… 14
新入会員 …… 15
会務報告 …… 16
ルーム日誌 …… 17
会員異動 …… 17
INFORMATION …… 17
編集後記 …… 19

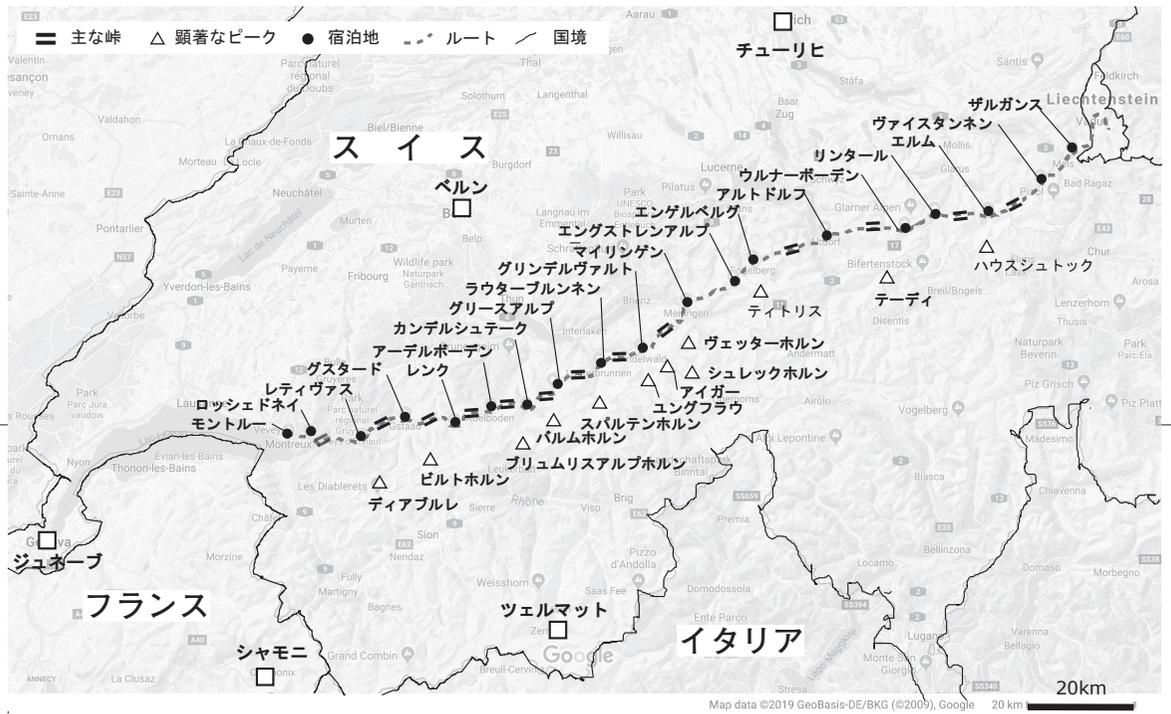


クラウセン峠からの下りで見たストイビの流

ヒテンシュタインという小さな国を訪ねてきて面白かったが、この部分は取って付けたようなもので、この日の行動は省いてしまっても全く問題なかった。

VA1は別名を「アルプスの峠ルート」とも言うように、毎日のように峠越えがある。1日の行動としては、距離にして15〜25km歩き、高度1000〜1500m登って、同じぐらい下るといった感じである。2日目はザルガンス(4800m)からヴァイスタンネン(1000m)までの登りだけだが、翌日からほぼ毎日、顕著な峠を越えるようになる。

まず3日目にはフォー峠(2233m)を越えてエルム(9800m)まで、翌日はリチュエトリ峠(2261m)經由リントール(6500m)まで、5日目はウルナーボデーデン(13700m)という小さな村で泊まる。次の日はこのあたりの交通の要衝であるクラウセン峠(1948m)越えである。トレッキングのルートは車道とは別に付けられているが、峠に達する所で



一緒になる。そこからまた車道から離れて、長い下りがアルトドルフ（460m）まで続く。標高からも分かるように、このあたり

でも高いピークは大体氷河を伴っている。

ここまでフォール峠で雨に降られた以外は大体良い天気だったが、7日目から顕著に天候が悪化した。アルトドルフからジュレネン峠（2291m）へは長い登りが続くが、峠に着くまではまだなんとか天気は持った。しかし、峠からの下りで雨が降り始め、あつという間に土砂降りになってしまった。ここはシュテイレンバッハという川が東から西に流れる幅1km弱のU字谷になっていて、垂直に近い南北の壁には数本ずつ細い滝が懸かっている。ところが、強い雨が10分ほど続いたところから、南北の壁は見渡せる範囲すべて（1km以上）が滝になってしまい、谷底に向かって大量の水を降らせただからびつくりした。突然、イグアスの滝が出現したようなもの。幸いなことに4輪駆動車が通りかかって、エンゲルベルグのホテル近くまで乗せてくれたので、あまりひどい目には遭わずに済んだ。

8日目も大体雨で霧の深い天気、終点まで行ってもティトリスは見えない。この日はヨッホ峠（2207m）を越えてエングストレンアルプ（1830m）まで。

ベルナーオーバーラントの山々のパノラマに感激

9日目に、相変わらずの雨と霧の中をマイリンゲン（600m）に着いた。ここからはグロッセシャイデック（1962m）とクライネシャイデック（2061m）の2つの峠を経て、グリンデルヴァルトとラウターブルンネンという、ベルナーオーバーラントの中心地を通る行程である。VA1沿いの4000m峰は、すべてこの地域にある。特にグリンデルヴァルト（1030m）はアイガー、メンヒ、ユングフラウの三山の麓にあつて、多くの観光客でにぎわう。つまりVA1のハイライトと言うべき地域なので、かなり期待して来たのだが、エンゲルベルグ以来の悪天候がまだ続いていた。

仕方がなく11日目はグリンデルヴァルト滞在とし、町の北側のフイルストヘケープルカーで登る。そこからバッハアルプゼーという湖



ファウルホルン頂上からのベルナーオーバーラントの山々。左からヴェッターホルン、シュレックホルン、フィンスターアールホルン、アイガー、メンヒ、ユングフラウ、ブライトホルン、シュパルテンホルン

に向かい、さらに登ってファウルホルン(2681m)に着いた。これは山頂に山小屋があり、大勢のハイキング客でにぎわっている。頂上は小屋の屋根の上のような感じで、そこでしばらく休んでいると、雲海の上に特徴のある山々が姿を現わした。東から西へヴェッターホルン、シュレックホルン、フィンスターアールホルン、さらにアイガー、メンヒ、ユングフラウの三山まで、すべてが雲の上に並んでいる。やっと山々を見ることができた。

この景色に感激して下っていくと、すぐに山々は雲に隠れ何も見えなくなった。帰路はフィルストからグローセシャイデックへの道をたどり、そこから雨の中をグリンドルヴァルトへ戻る。翌12日目には雨はやんだが雲の多い天気が続き、クライネシャイデックを越えてアイガー北壁に最も接近した場所からも、ヴェッターホルンがやっと見えただけで我慢しなければならなかった。この日はラウターブルンネン(800m)泊まり。

13日目からやっと天気が回復して、山々も見えるようになった。ゼーフィンネン峠(2612m)までは長くきつい登りで、目的地までは

距離も24kmあって大変だ。峠への登りは傾斜こそきついですが、しつかりした道があつて危険はない。一方、下りの方は富士山の砂走りみたいな急な崩れやすい斜面で、安全確保のために数百mにわたつて木で階段を造つてある。この日の目的地はグリースアルプ(1410m)という村だが、ここは隠れリゾートみたいな所で、ホテル代が異常なほど高い。私はこの村から20分ぐらい離れたゴルネレンという所のドミトリイに泊まった。

14日目はここから19km弱のカンデルシュテークへ。途中、ホーテュルリという峠があるが、このの高さは2778mで、VA1での最高地点。峠のすぐ上にはスイス山岳会のプリュムリスアルプ小屋があつて、ここに泊まるという魅力的な選択肢もあつた。しかし、とにかく長丁場なので行程を延ばすことを優先し、カンデルシュテーク(1180m)まで下つた。

トレッキングの終点はレマン湖

15日目はブンデルフリンデ峠(2385m)を越えてアーデルポードン(1350m)まで、その翌日はハーネンモース峠(1956

m)を通りレンク(1060m)へ、17日目にはトリュットリスベルク峠(2038m)經由グスタード(1050m)へ。

行程全体の4分の3を過ぎたこのあたりがドイツ系の人たちが住む地域の西の端で、これより先はフランス語の地域だ。地形もだんだん低くなり、近くに見えるのはすべて2000m台の山だけになった。しかし、峠ごとに、また通過する町ごとに景色が変わり、飽きるという感じはしない。

18日目はグスタードからジャブル峠(1884m)を越えてレティヴァス(1140m)へ。ここは小さな村だが、チーズの名産地である。19日目はロッシェドネイ(1980m)まで。ここはモントルーの裏山のような位置で、これまで登山鉄道が来ている。夕方までに時間がないので列車で下つてモントルー(370m)に泊まり、翌朝、また登山鉄道で登つてきて最後の下りを歩くことにする。

最終日の9月11日も良く晴れた。ロッシェドネイに戻つて急坂をゆつくり下る。下り道は途中いくつかに分かれるので、モントルーへの下り道から外れ、隣町のヴェイ



エッシェン湖の上にそびえるブリュムリスアルプ山群の
フリュンデンホルン(左)とドルデンホルン

トウーへ向かう。ここは、レマン湖のほとりにシヨン城という古い城塞があつて有名である。なかなか保存の良い城で、地下室から鉄格子のはまった窓越しに見るレマン湖は、美しい風景であつた。こうしてVA1の旅は終わった。この後スイスでもう1泊して、9月13日にジュネーブから東京への帰国便に乗った。

IT時代のトレッキング

スイス・トレッキングの様々な面については昨年書いたので、重複することについては省略する。このルートの案内書は『Kev Reynolds, "Treking the Swiss Alpine

Pass Route, Third Edition, Milnthorpe, Cicerone, 2017"である。アマゾンでまず電子版を購入したが、やはり印刷した本の方が使いやすいため、ペーパーバック版を追加で買って持っていた。

問題は地図である。昨年のシャモニ〜ツェルマット・ルートでは5万分の1の集成図2枚(普通図なら4枚)だけで良かったが、今度の場合、東西に長いルートのため、普通図7枚と集成図2枚が必要である。重さはともかく、かさど料金がばかにならない。調べてみると、Swiss Map Mobileというスマホ用のアプリがあることが分かった。これは基本的にはフリーソフトだが、無料の場合、地図をほとんど内蔵できないために現場でダウンロードする必要があり、接続が安定しない山中ではほとんど使えない。しかし、年会費4CHF(5000円弱)を払うと、スイスの地形図(1万分の1図から50万分の1図までの5種類)のすべてがダウンロード可能になる。数GBの容量が必要だが、メモリカードを入れれば問題ない。このアプリにはGPSによる位置測定結果を記録するだけでなく、以前の記録フ

イルを読み込んで画面にルートを示す機能もあり、VA1のルートを示すファイルがネット上にあつたので、それも内蔵しておくことで非常に重宝した。

地図も含めてフリーなソフトとしてMaps.meなどが有名だが、これでスイスの山地を表示してみると、地名が入っている所が極端に少なく、ほとんど使えない。Google Mapは詳しい地名やホテルなども表示されて便利だが、これも見るときにダウンロードする仕組みなので、フリーWiFiのある宿などでしか使えなかった。

このほか頻繁に使つたのはMeeteoSwiss, PostBus, SBBMobileで、天気予報やバスと汽車の時刻表のアプリである。そのほかSwitzerland Mobilityというのがスイス国内の多くのトレッキング・ルートを集めている。また、MySwitzerland.comというサイトはトレッキングに限らず、スイスに関する多くの情報を提示していて参考になる。宿の予約はすべて前年同様Booking.comで行なった。ともかく現代の旅行にはこういうIT情報の利用は欠かせない。なお、スイスのトレッキングの

魅力の一つは、景色の美しさだけではなく各地に歴史的な記憶が残っていることであろう。たとえば、アルトドルフはウィリアム・テルの町として有名で、広場にはテルと息子の大きな銅像が立っている。また、ザルガンズ付近には「アルプスの少女ハイジ」の舞台であるマイエンフェルトなどがあり、「ハイジランド」という標識も見られた。シヨン城については、イギリスの詩人バイロンが「シヨンの囚人」という詩で、16世紀にこの城に幽閉されたジュネーブの宗教改革者フランソワ・ボニヴァルのことを取り上げ、一躍有名になったという歴史がある。

また、別の魅力としては、ルートの各地がそれぞれ個性を持っていることも挙げたい。たとえば、ハーネンモース峠では各地から来た人たちが、リモコンのグライダーを飛ばして遊んでいる。一方、ロッシェドネイからモントルーへ下るルートの途中はパラパントの練習場になっているようで、色とりどりのパラパントが悠然と空を舞っている。眼下にはレマン湖が広がり、さぞ気持ちが良いだろうと推測された。

第7回小島烏水祭開催される

四国支部長 尾野益大

第7回小島烏水祭（日本山岳会主催、四国支部主管）が2019（平成31）年4月6日（土）、香川県高松市で開かれた。前半の記念講演会と昼食懇親会には50人が出席し、後半の碑前祭には約80人が訪れ、1年に一度、創設者の烏水に思いを馳せた。

前半の記念講演の講師は神奈川支部監事・砂田定夫さん。砂田さんは「小島烏水と横浜」と題し、烏水は高松で約2年間過ごした後、横浜約40年、米国12年、晩年は東京・阿佐ヶ谷で18年暮らした、と教えてくれた。

また、砂田さんは、烏水は横浜



記念講演会で講演する砂田定夫会員

で志賀重昂の『日本風景論』を読み、岡野金次郎、ウォルター・ウェストンと出会って登山に目覚めたと話し、「これらの出会いがなければ、日本山岳会の創設時期はもっと遅れたであろう」と強調して参加者を頷かせた。

続く昼食懇親会では、まず野澤誠司副会長による主管者四国支部へのねぎらいの言葉と、次世代育成の必要性の訴えがあり、尾上昇23代会長、森武昭24代会長、有元利通・静岡支部長、込田伸夫・神奈川支部長、辻和雄・関西支部事務局長、木村康男・香川県山岳連盟会長（四国支部会長）らが烏水に対する想いを述べた。

海外から応援も駆け付け、烏水を研究しているワシントン大学のアーロン・ジャズニーさん、英語講師のエリザベス・ネトーさんが烏水の残した功績について称賛した。碑前祭は、来賓に鎌田守恭・香川県議会議員、松下雄介・高松市副市長（大西秀人市長代理）、中村順一・高松市議会議員を迎えた。

主催者挨拶は野澤誠司副会長が務め、来賓挨拶、献花。献花を代表して金井良碩・関西支部長から挨拶をいただいた。

恒例の詩吟もあり、烏水の孫で四国支部会員・小島誠さんが、烏水の名文「昨日の我は今日の我にあらず、今日の我はおそらく明日の我にあらずらむ、而してこれ向上の我なり、いよいよ向上して我を忘れ、程を逐ひいて自然に帰る」と吟じた。

この名文は「山を讃する文」のくんだり。烏水が116年前の八ヶ岳登山の帰り、甲斐駒ヶ岳の麓の台ヶ原の宿「竹屋」で書いた。

イベントの最後は「剣山頂上ヒュッテの歩み」と題する講演。ヒュッテ2代目主人・新居綱男さんがマイクを握った。新居さんは、先代の熊太が64年前に西日本第2の高峰・剣山山頂の北側にヒュッテを建てたと紹介。「熊太は当時65歳だった。妻も娘も反対するなか、自分の意志を貫いてヒュッテを建てた。水や明かりを得る苦勞を克服しながら、一等三角点を保護し、ときには遭難者を助け、希少植物の保護に尽力した」と締めくくった。

翌日は讃岐山脈の最高峰・竜王

山を縦走。神奈川、多摩、四国支部の13人が好天の下、ユキワリイチゲ、アワコバイモを愛でるおよそ半日の山旅を楽しんだ。さらに翌日には一部の人が分かれて、剣山や讃岐富士の別称を持つ飯野山に登った。

烏水祭は昨年の第6回まで碑前祭の後に夕食懇親会を開いてきたが、今回は昼食懇親会、碑前祭の順で試みた。各地方の参加者が日帰りでも参加しやすいだろうと考えたからだ。そして、森24代会長からは、烏水祭を盛り上げるため、神奈川支部からも応援・協力したいとの配慮を得た。感謝して報告させていたたく。



満開の花壇を前に、碑前祭の参加者全員で記念撮影

REPORT

山梨支部創立70周年記念集會を開催

山梨支部 矢崎茂男

山梨支部創立70周年を記念し、平成31年2月23日(土)に式典と祝賀會を、甲州市勝沼ぶどうの丘で開催した。

式典は来賓・会員34人の参加を得て、午後1時30分に開式した。初めに深沢健三支部長が挨拶。「戦後の混乱が続く昭和23年12月に、早くも支部は、山梨県山岳連盟とともに産声を上げたが、これは先輩諸氏の戦後復興への情熱の具現だった。支部はその後、木暮祭、南アルプス・フォーラム、山の博覧會、やまなし登山基礎講座などの事業を積極的に開催し、大きな成果を挙げてきたと自負している。今後も創造的な活動を通してさらに発展していきたい」と抱負を述べた。

続いて3人の来賓から祝辞をいただいた。小林政志・日本山岳會會長が、「山梨支部は33支部中7番目に設立された伝統ある組織。木暮祭、深田祭、山の博覧會などの地道で個性的な活動は、ほかの支部のモデルとなってきた。今年8

月には『山の日』記念全国大会が甲府市で開催されるが、山梨支部の協力を得て成功させ、山の魅力を一層広めたい」、有元利通・静岡支部長は、「山梨支部の積極果敢で息の長い活動に敬意。越後支部・信濃支部を加えた中部ブロック4支部が一段と結束を深め、ともに活動の質を高め合っていきたい」、秋山教之・山梨県山岳連盟會長からは、「昭和23年に同時発足した

県岳連は、12月に70周年式典を先行開催した。表裏一体で歩んできた日本山岳会山梨支部の式典に出席でき、感慨深い。山の博覧會など数百名が集まる大イベントの開催、十数回の連続講座からなる登山基礎講座の開講など、企画力と組織力に感服している。会員の減少や高齢化対策に、ともに取り組んでいきたい」など、温かい賛辞や心強い激励をいただいた。

記念講演では、深沢支部長が「甲斐百山」と題して演壇に立った。〈講演要旨〉——70周年記念事業として、『甲斐山岳』11号で「甲斐



記念集會で挨拶する深沢健三支部長

百山」を特集する。

これは遠藤靖彦・前支部長時代に構想された事業で、元は65周年記念として発表することを目指したが、諸般の事情から編集が進まざり、70周年まで持ち越された。12号発行は本年8月を見込んでいた。「甲斐百山」は、平成9年に選定された「山梨百名山」以外の山のうち、山容が優れている山・個性豊かな山や、山梨県人の生活や歴史と関わりが深い里山などから100座を、支部選考委員会が選定した。この101番から200番までの名山の魅力や由緒来歴、登山ルートなどを、会員が分担して踏査・執筆作業を進めてきたが、踏査が困

難な山も含まれていて編集が遅れている。夏の発行を楽しみにしていただきたい。なお、百山にはかわいらしい里山からルート不明瞭な深山・高峰まで、多彩な山が並んでいる。自分の力量に合った山を選んで、登山を楽しんでもらいたい。——

記念式典は1時間ほどで終了したが、古希を迎えた支部の歩みを振り返り、現在と未来を考える意義ある機会になった。式典後は祝賀会を行ない、地元の高規格高いワインを注ぎ合って交流を深めた。遠藤前支部長が支部発足・停滞・再生の大きな流れを回顧し、内藤順造顧問は平成5年の全国支部懇談会開催を契機とする支部再生の経緯を語るとともに、県岳連と支部の相互補完的な活動の必要性を説いた。

翌日は、記念山行として大蔵經寺山(715・6m)に登山。快晴に恵まれたが、2月とは思われぬ高温に、参加者一同、大粒の汗を滴らせた。70年の間、多くの先輩が汗を流して守ってきた個性豊かな山梨支部。これからも汗をかくことを厭わず、価値ある活動を創造していきたい。

REPORT

大久保春美記念「第9回ふれあい登山」を
開催

4月7日(日)、晴天の下、まさに100%満開となった桜花が咲き誇っている。障がい者もご家族も障害者スポーツ関係者も、そしてJAC会員も皆が花に酔いしれ、幸せな気分浸っている。埼玉県入間市街から続く加治丘陵の桜山展望台山頂にそれぞれお弁当を広げ、もう仲間としておかずを分け合ったり、デザートのお菓子を配ったり、まさに「ふれあい」が広がっている。

花の季節と温もりのある天気が、



JR八高線・金子駅にて参加者全員で記念写真に収まる

埼玉支部副支部長 高橋 努

その背中を優しく押してくれた。2010年、埼玉支部設立と同時に社会貢献委員会が発足し、故大久保春美さん(前埼玉支部長、日本山岳会副会長)が委員長に就任された。すぐに障がい者との「ふれあい登山」構想が示され、春美さんのリーダーシップで埼玉県障害者スポーツ協会と連携しながら着々と準備が進んだ。

「第1回ふれあい登山」は飯能市近郊の日和田山を舞台に、19名の障がい者、ご家族、そして23名のJAC埼玉支部会員、総勢63名で開催された。私も1班リーダーとして参加したが、なにせ障がい者との登山経験はゼロである。春美さんから事前に障がい者の方たちとのふれあいに関して若干のレクチャーを受けてはいたものの、出発時はかなり緊張した。しかし、ワンピッチを歩く間にすぐに緊張感という姿勢から「ともに楽しむ」という気持ちに変わったのだ。まさに「ふれ

あい」効果であろう。

一方で私たちにとつて日和田山はほんの散歩気分で歩けるコースだが、障がい者の皆さんにとつては結構なチャレンジだということにも気付いた。なんでもない場所でもチャレンジがあり、頑張り所なのである。解散後のJAC会員の打ち上げは大いに盛り上がり、毎年やりましょう、という熱い想いを共有した。春美さんの嬉しそうな笑顔が忘れられない。

以来、毎年この季節に埼玉近郊のハイキング・コースで開催し第9回を迎えたが、年によつては120名を超える多人数のこともあり、一般ハイカーも「どういう団体ですか？」と関心を呼んだ。少し急な下りには、プロガイドの支部会員によつてフィックスロープを設置する、医師の会員がAEDを担いで備えるなど、安全、事故防止には最善の注意を払ってきたが、お陰さまで無事故である。

昨年1月に思いがけず春美さんのご逝去に接し、大きな悲しみに襲われた。1周忌の墓前で協会事務局長から「大久保春美記念・ふれあい登山」としたいとのご提案があり、春美さんから後を託され



満開の桜の下、加治丘陵をハイキングする

た清登緑郎さん(現理事)はじめ一同大いに感激した。お聞きすると協会内でも春美ファンが多く、ペットネーム「ハルミン」というオレンジ色の花の縫いぐるみを作り、大事にしているとのこと。春美さんは、どこでもこんなに慕われていたのだ。

私たちはこの「ふれあい登山」をボランティア活動とは思っていない。障がい者とのふれあい登山を心から楽しみ、むしろ、私たちが方が学ぶことも多い、すばらしいイベントだと捉えている。だから、皆がこの日を楽しみにしている。「ようやく皆さんも分かってくれたわね」天から春美さんの声が聞こえるようである。

FOREST GROWING

平成から令和へ、森づくりは続く

日本山岳会高尾の森づくりの会代表 吉川正幸

平成から令和の世に代わる4月

から5月にかけて、植樹祭など春の行事のために、私は毎週のように高尾の森に入りました。森の中で目を上に向けて、一斉に広葉樹の葉が開き、山桜が咲き、日々緑の色が増していくのを見ることができません。特に、高尾の森づくりの会の植栽地の広葉樹は、北高尾の森の彩りに鮮やかな緑を加えています。

新元号の語源となった『万葉集』

が編まれた時代から、日本には新緑のわずかな色の違いを表わす、若葉色、萌黄色、翠緑、若草色など、いろいろな言葉があります。日本人の持つすばらしい感受性と色彩感覚を示す緑の呼び名です。正直なところ、杉と檜の花粉にかすむ私の目と頭では、これらの微妙な色彩の区別がつきません。しかし、森の広葉樹は日々変化していきます、また、同じ日でも葉の色は樹種により微妙に変化していて、美しいとしか言いようのない彩りのグラデーションをつくり出してい

ます。

たづさへて登りゆきませ山はいま木青葉してさやけくあらむ(注)

この歌は、美智子上皇后が、1993(平成5)年に「皇太子の結婚を祝ふ」兼題「青葉の山」として詠まれたものです。当時の皇太子殿下が山に登ることがお好きであることをご承知の上で、森の緑の明るく清々しい有様を、「青葉」という言葉を使い、ご成婚の喜びと同時に表わしたのと思われまます。緑の山に登る喜びを表わしたお歌を、我々も春の山に入るたびに思い出してみたいものです。

日本山岳会の会員であられる徳仁親王が今春、天皇陛下に即位されたことを、素直にお喜び申し上げます。

私どもの『山岳』2016年に掲載された「歴史と信仰の山を訪ねて」の長文の寄稿から、陛下が山に関わる文化に深い造詣をお持ちになり、また、実際に各地の山を登られていること

が分かります。ご公務などの制約のあるなかで、文化を学び、登山を繰り返される陛下のお姿は、我々会員のお手本のようにも思えます。

陛下は、皇太子時代に日本山岳会の会員となつてからは、ご公務がある場合を除いて、師走に開催される本会の年次晩餐会にご出席されています。「山の日」制定当時の役員であつた私は、2016年末の晩餐会では、陛下のご案内係を仰せつかりました。「山の日」のために作られた「高尾の森づくりの会」の展示写真の前で、陛下が「高尾の会を存じています」と仰せられたことは、高尾の森づくりの会員として喜びでもあり、深く印象に残るできごとでした。

東京都八王子市の武蔵野御陵に近い小下沢に、高尾の森づくりの会の拠点となる作業小屋を設けています。その小下沢ベース小屋から林道を10分ほど遡ると、東京原木協同組合の植栽地に「浩宮殿下



植栽した広葉樹が多く見られる景信山西斜面。2019年春の撮影

御誕生記念植林地」の記念碑があります。確かなことではありませんが、皇太子時代の陛下が武蔵野御陵を訪問した際に、記念碑まで来られことがある、という伝聞があります。

日本の植樹活動や森づくりを、毎年、春に行なわれる全国植樹祭や「みどりの日」の式典への天皇陛下のご出席、秋に行なわれる全国育樹祭への皇太子殿下のご出席に



令和改元を寿ぐ桜と富士山。伊豆半島・大仁高原より

よって力付けていただけけることは、大変ありがたいことです。昨秋、初めて東京で開催された全国育樹祭の式典においては、当時の皇太子殿下ご夫妻の前で、高尾の森づくりの会の創始者である故河西瑛一郎会員が、長年の森づくりに寄与した「緑化功労者」として表彰を

受けたことは、高尾の森づくりの会の栄誉でした。

高尾の森づくりの会は、本会の自然保護委員会の有志が中心になって2001年に創設されました。現在では、高尾の森づくりの会には、日本山岳会会員以外の地元の方々や、法人会員の社員の方も多く参加しています。

当初から、広葉樹を植えて針葉樹との美しい混交林をつくろうという目標を持ち、毎年、春の植樹祭には、多数の会員や一般の方々が参加して、杉、檜の間に多数の広葉樹を植えてきました。その結果、18年を経た現在の植栽地には、着実に広葉樹が美しい新緑の森を形づくっています。林野庁森林管理署から日本山岳会が借り受けている協定国有林の中に、新しい植栽地を見

出すことができず、今年は小規模な植樹祭しか行なうことができませんでした。しかし、今後も永続的に広葉樹の植樹を増やす努力を続けていきます。

言うまでもなく、木を育て、森をつくるのには長い年月がかかります。そのためには、私たちの活動を永く続ける必要があります。2021年には、高尾の森づくりの会は創立20周年を迎えますが、そのときは、私たちが微力ながら森づくり活動を続けてきたことで、北高尾の山に美しい彩りの森が増えていくことを、創設時からの先輩会員と一緒に喜びたいと思います。

高尾の森づくりの会の創設者たちの夢は、針葉樹だけの暗い森の中に、春には桜が咲き、秋には紅葉に彩られる、明るい広葉樹の林を築くことでした。その想いは、今でも私たちの夢として持ち続けたいと思います。そこへ至る道はまだまだ遠いのですが、日本山岳会と会員の皆様のご支援をいただき、これからも夢を追っていききたいと思えます。

〔注〕引用は平成17年、海竜社刊『歩み』皇后陛下お言葉集より

REPORT

最近の中国登山界事情

中村 保

中国横断山脈を総合的に紹介する大書『大横断』（A4判 700頁、楊波涛編）に、この山城探査の先駆者として祝辞を書いた。その出版を機に4月上旬、北京大学で「登山アウトドア研究」のイベントが開催され、メインゲストとして招待された。テーマは「最後の辺境―チベットのアルプス」。170枚のスライドで中国の登山家に馴染みの薄い未踏の山々を紹介した。北京大学の講堂に若者を中心に180名ほどが来てくれた。質疑応答、『大横断』の紹介を併せて3時間、熱気にあふれる集いだった。

中国はお金持ちになった。航空券は言うに及ばず、豪華な5つ星のホテルに4泊、講演料として20万円いただいた。講演に加え登山・探検・アウトドア・地理の専門誌『OUTDOOR戶外探検』『山野』『中国国家地理』関係者とのインタビューも行なった。さらに北京大學山岳会「北大鷹社」創立30年祝賀会にも招待された。中国の登山を紹介する映画も上映され、ヒマ

ラヤ、アラスカ（デナリ）、南極での活動も知ることができた。

ツアー登山が盛んで、集団的な行動が主流ではあるが、単独あるいは少人数で行動するクライマーも育っている。国際的な評価を得たヤン・ドンドン（四姑娘山南壁に新ルートを開くなど先鋭的なクライマーとして育ち“American Alpine Journal”の常連になったが、惜しむらくは天山山脈で遭難死した。成都の若手クライマーはソロで四川省の最高峰、難峰ミニヤ・コンカ（7556m）の第13登を果たした。8000m峰14座の完登者も出てきた。深圳在住の若手クライマー、張梁Zhang Liangである。Kendal Mountains Festivalも各地で開催されている。

中国は近代登山・アルピニズムの歴史はないので、アルパインクラブのような山岳会はなかった。北京大學山岳会（名称：北大山鷹社Mountaineering Association of Peking University＝MAPKU）は中国でできた初めての山岳会で、

わずか30年の歴史である。

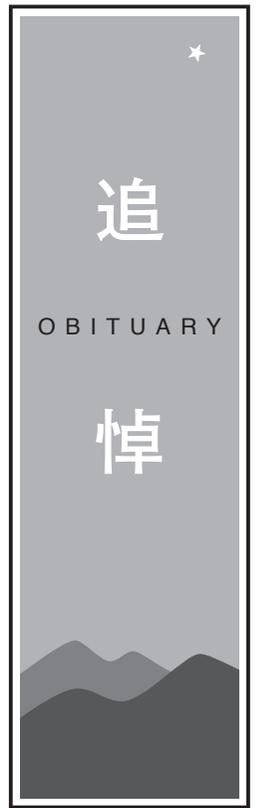
ヒマラヤ・データベースの情報によると、去年までネパール側からエヴェレストに登った中国人の人数は計366名（51名が女性）で、4人が無酸素。エヴェレストを除いたほかの8000m級の登頂中国人数は325名（49名が女性）であつた。その背景には、エヴェレスト登頂によって有名になりたいという誘惑が強い。その一方、西欧から真のアルピニズムの精神を受けた、未踏峰やアルパイン・スタイルの登山活動を行なう先鋭登山家も少しずつ台頭している。

山岳協会としては、中国登山協会が登山許可を出す行政機関（体育協会傘下）であり、各省の登山協会（四川、青海、新疆を束ねているが、会長以下スタッフは役人であり、自ら登山活動をするクライマーは少ない。とは言え、1988年の日中ネパール3国エヴェレスト登山を主導している。中国登山協会はスポーツ・クライミング、アイス・クライミングの普及には力を入れ、トレーニング担当の理事を置き『Outdoor Safety Handbook（登山戶外安全手冊）』（中国語版）を編集、また、2028年の

北京オリンピックのためChinese Olympic Committee（中国奥林匹克委員会）発行の立派な『Mountaineering and Outdoor Sports in China（登山戶外運動）』（英語・中国語版）の冊子作成に関わっている。

登山の中心、四川省の成都は北京以上に活発である。四川登山戶外スポーツ協会は、戶外活動にも重点を置いている。ヒマラヤン・クライマーで、スカイダイビングの第一人者、劉勇四川觀光学院教授が成都の登山界を牽引している。3年前より四川大學、四姑娘山管理局とタイアップして、登山アウトドアの国際的なフォーラムを成都と中国のシャモニ四姑娘山で開催している。

チベット自治区ではチベット族のヒマラヤン・クライマーが育ち、チベット登山協会と戶外スポーツ協会があり、独自の活動をしている。しかし近年、自治区での政府の規制が強まっており、登山活動が著しく制限されている。崑崙、天山の広大な山域を有する青海省、新疆省にもそれぞれ登山協会があつて活動し、雲南省にも昆明登山協会があり、30年の歴史がある。



三好まき子さんを悼む

大森久雄

本会図書委員会委員長を務めていた三好まき子さんが亡くなった。1月28日。享年63。あまりにも早過ぎる最期だが、知らせを聞いても驚きはなかった。それは予見されたことがその通りに起きたためだからである。内臓の癌はその2年も前から始まっていて、大手術を終えても明るい展望はなく、早晚その時が来るであろうことは、本人も覚悟しているのがこちらにもわかって、辛い日々が続いている



三好まき子(みよし・まきこ)
会員番号9945

た。昨年の12月13日、住まいの近くの駅までなら出て行ける、というところで、私たち夫婦は池袋駅から東武東上線でふじみ野駅へ出かけた。駅ビル内の喫茶室で面会したけれど、以前の若々しい姿は消えて、体に異常があるとわかる姿だった。それでも話し方に乱れはなく、毅然としていて、感動ものであった。

一昨年の春、草津に行つてきますから、という挨拶があった。滋賀県の草津で、その病院で手術をする、というのであった。病気はシロウトには理解できない内容で、いわば奇病の部類に入り、数少ない専門医がその病院にいるということだった。

私が図書委員会在籍当時から付き合いだから、30年は超す年月、毎月顔を合わせていた。入会紹介者は、図書や『山岳』の担当理事・委員長をしていた近藤信行さん。

彼女はマスコミ関係の専門学校に勤めていて、そこで教えていた近藤さんと知り合った。

明るい性格で人当りも良く、山歩きにも一緒した。私が図書委員会をやめてからも付き合いは続いていたが、そのうちに彼女が図書委員会委員長になって、そこから別のタイプの彼女の姿が見られるようになった。当時、図書委員会のかかわる混乱があつて、そういう状況のなかで委員長を引き受ける度胸の良さに驚いたけれど、実際に動き出すと、隠れていた能力が大きく羽ばたいていくのがよくわかった。たとえば、角幡唯介氏とか、『日本百名山』英訳者マーティン・フールド氏を招いて講演会を開く、図書紹介も活発に、中断していた図書交換会も復活、といった具合で、積極的に夢を持ち、外から見ても活性化しているのがわかり、図書委員会中興の祖だよ、と言ったこともある。

大のビール党で、大ジョッキをお替りしても乱れることはなく、それだけ飲んでトイレに行かないのはなぜ、と失礼な口をきいたこともあるが、会の内外で自分が目星をつけた人を誘って飲み会を開

く、あるいは山に登りに行く。そうしたこと集まる別働隊のようなグループが彼女を中心にもできていった。登山史や山岳図書のオーソドックスな知識を持たずによくやっているね、とひやかしたことがあるが、彼女の武器は、そうした別働隊から得る様々な知識なのだということがわかった。つまり、早く言えば、彼女は耳学問の達人なのであった。

ご主人にはお目にかかったことはないけれど、同じく山登りがご趣味なようで、しかも相当な通だとわかったのは、彼女がご主人とテントを持って行く対象の山である。たとえば、剣岳に行くのに、黒部ダムから降りてハシゴ谷乗越を越えてとか、農鳥岳に行くのに熊ノ平から大井川源流に降りて……というような計画に付き合っているのを聞いて、その夫婦愛の強さに感心すること再三であった。

器用な人で、掛け軸やブックカバー、御朱印帳を作つて銀座伊東屋ほかで売る、古書店を開く、というような一面も持っていた。数多くの可能性を秘めていると思える人がいなくなったのは、最大の痛恨事である。

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

北海道支部

キルギスの山勉強会

北海道支部は千島列島の生態系観察登山を目指して研究を進めていたが、アプローチャや国際的な諸事情から早期の実現が困難な状況で停滞している。

このため実現可能な舞台をほかの地域に求め、中央アジアのキルギス共和国の天山山脈に目標を定めた。キルギスは山岳環境保全の世界的な取り組みを提唱し、2002年に初めて「世界山サミット」を開くとともに、我が国「山の日」制定への牽引役となった国際山岳年の提唱国でもある。

今夏、キルギスに登山隊を出すべく企画しているが、それに先駆け「キルギスの山勉強会」を3月9日、札幌エルプラザに会員・会友23名が集まって行なった。

冒頭、西山支部長が10年前に訪

れたキルギスの山々のスライドを映写しながら魅力ある報告をして盛り上げた。

引き続き、野生動物の研究を専門とする信州大学山岳研究所教授の泉山茂之先生から「キルギスの自然と環境保全」をテーマに話が進められた。環境保全については、イシククル湖南部の金鉱山開発に伴い、3800〜4300mにある氷河が破壊されていること。絶滅危惧種で乱獲されているアルガリ(別名「マルコポーロシープ」、原始的な羊)や野生動物(アイベックス、雪豹、ヒグマなど)、家畜を加害する狼に発信機を装着し、行動範囲の生態調査を進めていること。シャシリク(羊肉の串焼き)といった羊料理や戒律の緩い食生活と宗教観、モンゴロイド系人種のため、極めて親日的な国民性であること。そして、国土の90%が山岳地帯であり、国土を横断している天山山



泉山茂之・信大教授の解説と勉強会に参加した会員・会友

脈には7000mのほかに、多くの4〜5000m級の無名峰があることなど、スライドによる話題提供があった。

続いて渡辺悌二先生(副支部長)から、この3年間で国情が激変しビジネス目的のスポーツ狩猟の普及により野生動物が乱獲されていること、中国系企業進出に伴う金鉱山採掘の大量土砂によって、氷河の衰退など環境悪化が加速している、とのコメントがあった。質問に答える形で、泉山先生から2〜3000m地帯では天山山脈の固有種を含め高山植物が豊かであること、中国の進出による金鉱山採掘に伴いキルギス人の雇用拡大と環境問題発生とのジレンマに陥っていること、狼の家畜被害防止への狩猟報奨金の不足により駆除が

追いつかない状況が語られた。その後、会場を地下の居酒屋に移し、「はるかなるキルギス」に思いを馳せるとともに、北海道のエゾシカによる高山植物食害対策としての狼復活に関する話題まで飛び出し、飲み会は大いに盛り上がった。

なお、千島列島の研究は継続しており、3月下旬には千島列島勉強会の番外編として「北海道、極東ロシアの希少植物と保全のためのネットワーキング」に参加して、北海道大学教授と連携して進めていることを付記しておく。

(京極紘一)

寄附金および助成金などの受入報告

(平成31年3月31日まで)

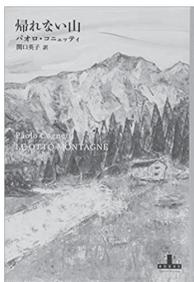
寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、 その他
小林 政志 理事	10	日本山岳会 運営費
京王電鉄株式会社	1,000	高尾の森づくり 活動支援
少額寄付者3名	—	日本山岳会 運営費



図書紹介

パオロ・コニエッティ著
関口英子訳

帰れない山



2018年10月
新潮社判 271頁
四六判 2050円+税

パオロ・コニエッティは1978年イタリア・ミラノに生まれ、大学で数学を学ぶも中退。のち映画制作の仕事に関わり、2004年に短編集にて作家デビュー。本編が初の本格的長編小説でイタリア文学界の最高峰「ストレーガ賞」はじめ、フランス、イギリスでも受賞、世界39の言語で翻訳されている国際的ベストセラーである。

著者は幼いころから父親と登山に親しみ、現在は1年の半分をアルプス山麓で、残りをミラノで過ごしながら執筆活動に専念している作家である。

本人はこう語る。「僕は、この小説を子どもの頃からずっと書きつづけてきたのかもしれない。というのも、僕の記憶とおなじくらい深く、僕のなかに住みついている物語だからだ。ここ数年、どんな小説を書いてきているのかと訊かれるたびに、二人の友情と山についてだと答えていた。そう、これはほかでもなく、二人の男と山の物語なのだ」。

この物語を読み進めるとすぐに、北イタリア、モンテ・ローザ山麓の情景が（実際に知らなくても）思い描け、そこで出会う2人の少年の瞳や視線、そして、それらが見詰めるその先に広がる雄大なアルプスの高嶺が眼に浮かぶのである。それは訳者の手腕にも負うだろうが、幼いころから温めてきた著者の、山々と、友情を育んだ相手への深い思いがけれん味なく、しか

し、情緒豊かに表現されているからであろう。

2人の友情、とりわけブルーノの寡黙であまりに純粹な精神は、この北イタリアのアルプスの山に抱かれた場以外では成り立つこともなかったはずで、つまり山が主人公の「もう1人」である。

ブルーノの、テコでも動かないような頑な「山男」としての生き方は、だれしもができることではないがために、それゆえに生じる様々な苦難が襲う。その苦難を「友情」が縦糸、家族関係が横糸となり「山」が深く包み込む。悲しいまでに一途な男と「僕」との友情、そしてアルプスの山々、その稀有な美しさがこの小説に貫き流れ、「帰れない山」に読者を誘う。

(中村好至恵)

エヴェレストが教えてくれたこと

平林克敏著



2019年3月
山と溪谷社判 304頁
四六判 1800円+税

時代に恵まれ、人に恵まれ、幸運の星の下に生まれ育った著者の人生にも、人知れず筆舌に尽くしがたい辛苦があったかもしれないが、私には、著者は多面的な常勝将軍に見える。

4回の初登頂登山において失敗はなく、1970年のエヴェレスト登山では酸素呼吸器開発に功績があり、登頂にも成功した。また、実業界においても成功を収め、その自信と信念に揺らぎはない。

これは氏の3冊目の著書で、力作である。山の世界と実業界での実績などから、未知や未踏を目指

す人たちの心を支える氏の稀有な存在が生み出した、傑出した名著と言える。後世に永く読み継がれる本になるだろう。これほど簡潔にして濃密な筆致で、未知を求め人たちの心情を描ける成熟した文化人を、もはや本会内に見付けることはできない。本会はもつと著者を活用するべきであろう。特に若者への推奨本として、会員必読の書と言えよう。精読を願う。

私は読みかけの本を置いて、一気に入読した。タイムリーに、いい本をお書きになった」という気がする。この著書は山の本であつて、山の本ではないと思う。どちらかといえば、人生哲学の領域に属する本ではないかという気がする。タイトルはよく考えられているが、私は第7章の「山・仕事・人」の方が内容的にベターに感じた。

日本人の劣化が指摘される昨今、まさにうつつつけの著書の出版である。政治家の劣化、企業経営者の劣化、官僚の劣化、若者の劣化、中年層の劣化などが話題になるが、今後、日本は地球環境悪化の影響よりも民族的劣化で世界的な地位を大きく低下させるかもしれないということに憂える。

若者に期待したいが、現状に満足し、ハングリー精神をなくした闘争心なき若者が多い現実に愕然とするが、私はスポーツと学問に打ち込むひと握りの若者にこそ、未来を懸けたいと考えている。

不勉強のせいで、私は同志社の歴史に疎い人生を歩んできた。本書で初めて明治8年、新島襄の『山河跋涉』を知った。京都の山河跋涉の歴史は同志社が発祥で、次いで京都一中時代の今西錦司に引き継がれ、その流れの一つが三高—AACKとなり、片方は児島勘次、太田徳風など同志社大学山岳会入脈につながる。

さらに著者には、明治・大正・昭和から戦後へと、旧制大町中学から大町高校時代に続く「山河跋涉の気風」の歴史体験があり、その後、同志社に学ぶという歴史の一貫性とも言える体験が生きている。「第1章 山から学んできたこと」から「第6章 チベットの遠征—2つの初登頂」までは、4つのヒマラヤ初登頂の記録と、エヴェレスト登山に関する各種装備の開発や登頂の記録が中心である。そして、後半の「第7章 仕事と山と人」と「第10章 青年に贈る十章」の

図書受入報告(2019年3～4月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
米倉久邦(編)	フォーラム「登山を楽しくする科学(XI)」:2019年3月16日(土)	20p/30cm	JAC科学委員会	2019	当会発行
立山ルート緑化研究委員会(編著)	中部山岳国立公園立山ルート緑化研究報告書第4報	152p/30cm	立山黒部貫光	2018	発行者寄贈
P.コニェティ/関口英子(訳)	帰れない山:Le Otto Montagne	272p/20cm	新潮社	2018	出版社寄贈
東京雲稜会(編)	夢:南博人の挑戦	542p/22cm	東京雲稜会	2018	発行者寄贈
日本山岳会関西支部(編)	未知の頂へ:ナンガマリII峰初登頂報告書	112p/26cm	日本山岳会関西支部	2019	発行者寄贈
日本スポーツ振興センター(編)	安全で楽しい登山を目指して:高等学校登山指導者用テキスト	196p/30cm	日本スポーツ振興センター	2019	発行者寄贈
杉山修	杉山修 山の木版画 作品集I	10p/30cm	杉山修(私家版)	2019	著者寄贈
杉山修	杉山修 山の木版画 作品集II	10p/30cm	杉山修(私家版)	2019	著者寄贈
杉山修	杉山修 山の木版画 作品集III	10p/30cm	杉山修(私家版)	2019	著者寄贈
P.ヴォールレーベン・長谷川圭(訳)	樹木たちの知られざる生活:森林管理官が聴いた森の声	264p/19cm	早川書房	2017	出版社寄贈
青柳健二	オオカミは大神:狼像をめぐる旅	160p/21cm	天夢人	2019	出版社寄贈
松崎中正	わが静かなる山	319p/20cm	白山書房	2019	著者寄贈
国井治(著)山本修二(編)	ザ・ロングトレイル:登山用具と人と50年	256p/21cm	国井治(私家版)	2019	著者寄贈
平林克敏	エヴェレストが教えてくれたこと:仕事も山登りも情熱と行動がすべて	301p/20cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
宮田八郎	穂高小屋番レスキュー日記	259p/19cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
伊藤薫	生かされなかった八甲田山の悲劇	239p/19cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
谷山宏典	鷹と生きる:鷹使い・松原英俊の半生	256p/19cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
根深誠	山棲みの記憶(ヤマケイ文庫)	303p/15cm	山と溪谷社	2019	著者寄贈
TAC出版編集部	上高地・安曇野 黒部・松本(おとな旅プレミアム 中部 No.3)	144p/20cm	TAC出版	2019	出版社寄贈
ライチョウ会議新潟妙高大会実行委員会	「第18回ライチョウ会議新潟妙高大会」報告書 2018年10月19日～22日(於)妙高市文化ホール	195p/30cm	ライチョウ会議新潟妙高大会実行委員会	2019	発行者寄贈

4章は、著者の行動哲学のエッセンスが述べられる。

十分に推敲された文章に隙はなく、実に分かりやすく、簡潔にまとめられたいい文章が続く。同感を覚える箇所も多く、表現力に工夫の跡が見られ、さわやかな印象を与える。特に9章には感動を覚える表現も多い。

最後に「青年に贈る十章」には、「未踏の大地に歩を進め、未知の領域を切り開こうとする人は、先人の教えの上に自らの想いを積み重ねて進む以外に道はない、との歴史観に立つことが重要である」「私たちは自らのために生きるのではなく、私たちの後に続いてやってくる人々のために、今、何ができるかを自らに問い、道しるべを築いていかなければならない」とある。けだし至言である。

(山本良三)





**平成31年度第1回(4月度)理事会
議事録**

日時 平成31年4月10日(水)19時00分～20時20分

場所 集会室

【出席者】小林会長、重廣・野澤各副会長、神長・永田・古川・谷内各常務理事、安井・清登・星・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事
 【欠席者】中山副会長・齋藤理事
 【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和元年・2年度役員(理事・監事)候補者について

以下の会員を令和元年・2年度役員(理事・監事)候補者とする事について審議した。

理事《再任》安井康夫(8494)、清登緑郎(8612)、野澤誠司(9863)、永田弘太郎(12319)、近藤雅幸(14972)、波多

野あをい(15208)、古川研吾(15888)、《新任》坂井広志(8798)、山本宗彦(9217)、神尾重則(10580)、清水義浩(11907)、古野淳(12194)、飯田邦幸(12207)、萩原浩司(13057)、柏澄子(13088)

監事《再任》石川一樹(11022)、《新任》黒川恵(7547)(賛成12名、反対なしで承認)
 2・寄附受人および管理規程(C-23)改正について

賛助会員入会の推薦と紺綬褒章授与の推薦について明確化するために、寄附受人および管理規程(C-23)を改正することについて審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

3・紺綬褒章推薦規程(C-34)制定について

当会が紺綬褒章授与申請団体に認定されたことに伴い、紺綬褒章

推薦規程(C-34)を制定することについて審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・平成31年度第1回評議員懇談会について(永田・谷内)

平成31年度第1回評議員懇談会について協議した。

【報告事項】

1・入会希望者22名、準会員入会希望者14名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2・紺綬褒章推薦規程(C-34)制定に伴い、円滑な運用を図る目的から紺綬褒章推薦規程手続き要領(D-8)を制定したことについて報告があった。(古川)

3・日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018の会計について報告があった。(古川)

4・記念事業委員会の活動状況について報告があった。(重廣・神長)

5・山岳研究所運営委員会の活動状況について報告があった。(安井)

6・総務委員会(総会関連)の作業状況について報告があった。(谷

内)

7・家族登山普及委員会の活動状況について報告があった。(谷内)
 8・登山計画書提出状況について報告があった。(谷内)

9・「山」4月号の発行について報告があった。(神長)

10・第7回小島烏水祭への出席について報告があった。(野澤)

【連絡事項】

1・谷川岳危険地区の登山禁止について連絡があった。(谷内)

【今後の予定】

- 1・常務理事会・理事会・令和元年度5月度常務理事会 5月7日(火) 18時30分
- ・令和元年度5月度理事会 5月15日(水) 19時00分
- 2・令和元年度通常総会
・令和元年6月22日(土) 14時00分
・東京都千代田区 主婦会館プラザエフ

ルーム誌 4月

- 1日 総務委員会 記念事業委員会
- 2日 常務理事会 スケッチクラブ
- 3日 図書委員会 YOUTH CLUB バックカント
- 4日 リークラブ
- 4日 YOUTH CLUB
- 8日 自然保護委員会 スキークラブ 九五会
- 9日 山岳研究所運営委員会 オトクラブ
- 10日 理事会 休山会
- 11日 評議員懇談会 山行委員会
- 12日 山岳地理クラブ スケッチクラブ
- 15日 総務委員会 資料映像委員

- 16日 スキークラブ 里山歴史研究会
- 17日 YOUTH CLUB 三水会 つくも会
- 18日 科学委員会 進会員制度検証PT 01会 みちのり山の会 マウンテンカルチャークラブ
- 19日 YOUTH CLUB オトクラブ
- 20日 山の自然学研究会 緑爽会
- 22日 会報編集委員会 青年部
- 23日 遭難対策委員会 平日クラブ
- 24日 家族登山普及委員会 麗山会 00会
- 25日 学生会 公益法人運営委員会 山遊会 緑爽会
- 26日 総務委員会 4月来室者 538名

会員異動

物故

- 笠原健二郎(4811)19・4・13
- 佐藤昭義(6643)19・4・3
- 中世古直子(6730)ご命日不明
- 瀬川昂生(7624)ご命日不明

退会

- 河阪一造 (8561)19・4・7
- 田路繁男(13086)19・4・22
- 川端源一郎(11402) 福井
- 涌井綱一(11477) 越後
- 田尻一實(11961) 福岡
- 大中政彦(12103) 福岡
- 内田洋平(13090) 福岡
- 浅野茂春(13128) 秋田



インフォメーション

- 岡田尚武 (13531) 東海
- 浅野武雄 (13984) 東海
- 島津常樹 (14877) 富山
- 水口忍 (14436) 東海
- 平野正晴 (15038) 東海
- 中重賢治 (15183) 東京多摩
- 澤田石一夫(15461) 秋田
- 室月隆之 (15887)
- 野口正江 (A0032) 東京多摩

◆山岳遭難防止セミナー

「安全に登山を楽しむために」長野県・山梨県・静岡県警察山岳遭難救助隊による現場からの報告

遭難対策委員会

南アルプスなどを管轄する長野県、山梨県、静岡県が対応している現場からの情報や、山岳遭難救助の実際を知っていただくことを目的とします。また、参加者の質問に答えるかたちでのトークセッションも行ないます。夏山シーズン

を前にして、皆様のご参加をお待ちいたします。

日時 6月9日(日)13時00分～15時45分
会場 主婦会館プラザエフ 4階

講師 長野県・山梨県・静岡県警察山岳遭難救助隊

費用 500円

申込み 日本山岳会ホームページよりお申込みください。

◆第44回山岳史懇談会「山人生70年に想う」

図書委員会

1970年5月、松浦輝夫、植村直己に続いて、日本人として初めてエヴェレストの頂上に立った平林克敏会員が、このたび『エヴェレストが教えてくれたこと』という新著を上梓されました。山登りで学んだことを企業経営にも活かしてきた氏の人生哲学が綴られた講演会を開催いたします。図書委員会以外の会員の方々もぜひご参加ください。

講師 平林克敏(本会元副会長、同志社大学山岳部OB)

日時 6月14日(金)18時30分
会場 日本山岳会104号室
問合せ 節田重節まで

TEL 090-4957-0813

✉ j-setsudai@ray.ocn.ne.jp

◆三ツ峠アツモリソウ保護活動のお知らせ

自然保護委員会／東京多摩支部

目的 絶滅危惧種・アツモリソウの保護活動(主に除草作業)を三ツ峠山荘のご主人の指導の下で行なう。

期日 6月16日(日)～17日(月) 1泊2日(16日だけの日帰り参加も可)

集合 河口湖駅・「天下茶屋」行きバス乗り場9時30分
日程 16日Ⅱ登山口―三ツ峠山荘(山荘周辺で保護活動、山荘で懇親会) 日帰り組は三ツ峠山荘―三ツ峠登山口バス停からタクシーで河口湖駅 17日Ⅱ早朝に三ツ峠山登頂および散策。朝食後左記2コースに分かれて下山

Aコース 往路と同じ
Bコース 府戸尾根コースから途中で鉄塔の巡回コースを下山

参加費 1万円(宿泊代・協力金・懇親会費など)

募集 20名

申込み 宿泊または日帰り、支部名・会員番号・氏名・住所・本人の携帯番号・年齢・山岳保険の加入先・緊急連絡先(氏名・続柄・電話番号)、希望下山コース(A、Bコースどちらかを選択)

*以上を必ず記載のこと
申込み・問合せ 川口章子

TEL 090-1252-2914
✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp
締切り 5月31日(厳守)
*小雨決行、荒天の場合は中止。

◆2019年度自然保護全国集会「生物多様性と自然保護」

自然保護委員会・埼玉支部共催

日時 7月6日(土)～7日(日)

場所 埼玉県男女共同参画推進センター

宿泊 ホテルブリランテ武蔵野

日程 6日Ⅱ基調講演、分科会、懇親会 7日Ⅱ支部報告、植

物観察会

費用 1万9000円
申込み 6月20日(木)までに、ハガキ、FAX、メールなどでお申込みを。〒274-0063 船橋市習志野台4-43-11102 川口章子

FAX 047-463-8721

✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp

*申込み者に詳細をお送りします。

◆花の山旅・加賀白山

山行委員会

花の名山・白山を比較的ゆつたりした行程で歩きます。通常1泊

2日の行程ですが、山麓で前泊、中は室堂、南竜山荘に2泊し、北アルプスからのご来光と花を十分に楽しみます。主峰の御前峰に加え、静寂な別山にも登ります。

日程 7月20日(土)～23日(火)

集合 20日(土) 小松駅15時

行程 小松駅Ⅱ白峰温泉(泊)Ⅱ別当出合Ⅱ砂防新道Ⅱ室堂泊(大汝峰往復)Ⅱ御前峰Ⅱ南竜山荘泊(別山往復)Ⅱ別当出合Ⅱ市ノ瀬Ⅱ金沢駅

歩程 2日目Ⅱ6時間 3日目Ⅱ7時間 4日目Ⅱ3時間

費用 4万2000円(宿代・域内移動車両費用・保険料など)。

小松駅までの交通費は各自負担

定員 15名

申込み 6月20日(木)まで 長島泰博 ☎090-5555418

✉ sanko@jac.or.jp

*申込み者に詳細を連絡します

◆白神山地ブナ林再生事業と自然観察会 青森支部

世界遺産・白神山地のバッファゾーン周辺の生育不良杉林地をブナ林に再生するための除伐や植樹などの作業、および原生ブナ林の観察会を行なう。寝袋、食料必携。テントはこちらで用意可。

日程 6月22日(土)〜23日(日)

集合 22日8時/JR弘前駅城東口および10時30分/奥赤石林道ゲート

解散 23日15時奥赤石林道ゲート、17時30分弘前駅送迎可

経費 500円(傷害保険料込み、当日徴収)

定員 30名

申込み 6月12日までにハガキか

FAX(0172-44172

37)かメールで須々田秀

美苑(〒036-0103 平川市本町北柳田96-2) ☎hsusuta@gmail.com

第35回 東北・北海道地区集会の「案内」紅葉の蔵王古道への誘い

宮城支部/後援 蔵王古道の会

本年の東北・北海道地区集会を蔵王で開催します。数年前に、修験者が歩いた古道が地元有志により切り開かれました。この古の道をたどります。

日程 10月5日(土)〜6日(日)

宿泊 Active Resorts 宮城蔵王

費用 1万7000円(泊3食、移動経費、記念品代など)

締切り 6月30日(日)

申込み 支部単位で事務局に直接メールか郵送で。会員同伴の場合は会員外でも可

募集人員 70名程度

予定 10月5日(土)14時受付

記念講演「蔵王の信仰の歴史と蔵王古道」佐藤洋一氏

15時30分 懇親会18時10月6日(日)交流山行

Aコース古道全行程(遠く田温泉〜刈田岳山頂)

Bコース古道の一部行程

どちらのコースも山頂か

らバスで下山。解散予定は宿泊地にて15時30分ごろ。問合せ 〒997-0034 仙台市宮城野区岩切字畑中9-12 宮城支部事務局 冨塚和衛 ☎myg@jac.or.jp

TEL 022-2255-7398

携帯 090-2790-3771

◆「榎有恒展」のご案内

茅ヶ崎ゆかりの人物館

榎恒治没後30年に当たり、その生涯と偉大な功績をたどる。

期間 4月20日(土)〜9月29日(日)

場所 茅ヶ崎ゆかりの人物館 茅ヶ崎市東海岸南6-6-64

TEL 067-81-5015

開館日 金・土・日・祝祭日 午前10時〜午後6時

交通 JR・茅ヶ崎駅下車(南口)「コミュニティバス・東部循環市立病院線」松ヶ丘コース1乗車、開高健記念館下車すぐ、「神奈中バス」辻堂駅南口行き(辻02系、辻13系)で東海岸北5丁目下車600m

観覧料 200円(18歳未満・高校生以下無料)

◆編集後記

●GW前半は、千葉支部の皆さん8名が佐渡に来られたので、案内がたらドンデン山にご一緒しました。ところが、金北山へ縦走する予定の4月27日は小雨から霰、ついに雪が降り出し、残念ながら中間地点で下山となりました。前夜の「お神酒」が足りなかったのでしょうか。残雪もことのほか多く、こんな年は初めてです。

●縦走は断念しましたが、アオネバ谷はスプリング・エフェメラたちが満開で、一面のニリンソウはじめシラネアオイ、カタクリ、キクザキイチゲ、キケマンなどの群落が、登山の消化不良を慰めてくれました。皮肉なことに28、29日は快晴で、帰路の船上から振り返り見た金北山が、「またおいで」と微笑んでいました。(節田重節)

日本山岳会報 山 888号

2019年(令和元年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュールハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政治
編集人 節田重節
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社